

会報

大学生協友の会



2021年6月1日

第30号

発行：大学生協友の会

〒166-8352 東京都杉並区和田 3-30-22 全国大学生協連役員室 TEL 03-5307-1111
E-mail: unicoop@univcoop.or.jp ホームページ <https://unico.itigo.jp/>

2021年度の総会にあたって

友の会幹事長 伊野瀬十三

変異ウイルスが蔓延する中、東京にも三たび緊急事態宣言が発せられました。

この間政府は国民に我慢を強いるだけで、頼みのワクチン接種も思うに進まず、対策の手詰まり感はありません。そして、本当に困っている人々に救いの手が差しのべられず、貧富をはじめとする格差がますます広がる中で、日本の社会はまさに深刻な事態となつています。最早、菅内閣の手では事態の解決は無理であり、一日も早い政権の交代が求められていると思います。

こうした中で大学生協は2020年度、経営的には全国で60億の欠損となりましたが、職員の頑張りや協力、そして生協間連帯によってなんとか窮状を凌いできました。2021年度新学期を迎え、当初対面授業が増えましたが、緊急事態宣言によって再びオンライン授業が中心となってしまいました。しかし、オンライン授業の積極的

な展開、事業連帯組織の再構築、大学との協力、協同組合間連帯の強化など組合員とともに知恵を絞りながら大学生協の存続のために奮闘しています。

友の会幹事会では大学生協の応援のために友の会会員に対し ①所属していた会員生協での商品購入 ②東京ブロック（旧地連）への支援カンパ ③「大学生協奨学財団」への寄付を呼びかけており、皆さんのご協力をお願いしました。

5月14日現在、東京ブロックあてカンパは62人の会員から計100万円を越える募金が集約されています。

引き続き募集しますのでよろしくお願ひします。

7月に開催予定の友の会総会はオンライン参加をお願いし、友の会として大学生協にどの様な応援ができるのかをメインとした意見交流の場したいと思います。

多くの会員の参加をお願いいたします。

大学生協友の会

二〇二一年度総会開催のご案内

日時：二〇二一年七月三日（土）

午後二時三十分から午後四時まで

方法：ズームのオンライン総会とします。

〈総会〉 午後一時三十分～二時十五分

議案：①二〇二〇年度活動報告の件

②二〇二〇年度会計監査報告

③二〇二一年度活動計画の件

④二〇二一年度予算計画の件

〈第二部 特別企画〉 午後二時三十分～四時

大学生協の再生に向けた取り組みについて

～OB・OGとしての応援推進のために～

報告：

①全国的状况と課題

大学生協連専務理事 中森一朗氏

②東京地区状況と課題

大学生協事業連専務理事 樽井美樹子氏

交流：会場及びオンライン参加者との意見交換

※ズームを利用した総会への参加方法など詳細は別添った案内をご覧ください。

幹事会開催日時：

総会当日十二時三十分～十三時一五分

尚、幹事会もズームオンラインによって開催

致します。

同封のハガキもしくはメールにて「近況」などをご連絡ください。

私と大学生協

1960年前後と70年前後の二つの時代(1)

—インタビュー・斎藤嘉璋—



いた。B29など見たこともない若者たちは、そのグライダーと大差ない“赤とんぼ”で米軍と戦う決意だった。

父は中学校(今の高校)の教員だったが、戦争が終わると間もなく自分の生まれた村の寺の住職になった。

順徳上皇が佐渡に流された時の持仏、かつて国宝に指定されていた観音菩薩像がある日蓮宗の本光寺という寺であるが、檀家が少なく僧侶のなり手がなかったためか教員兼任の住職だった。父が急に寺に入ることになったので、最初の1年ほどは小学4年の私がひとり一緒に寺に住んで小僧に近いことをした。

後で考えると、父には教え子を戦場に送ってしまったことを悔いるといった気持ちもあつてのことかもしれないが、「檀家に頼まれた」としか話さなかった。寺の小僧として「習わぬ経は読めぬ」ままであつたが、人生の無常、世の矛盾といったことを考える癖がついた。

中学生の時、1950年6月朝鮮戦争が起こり、社会科のN先生が社会主義中国の義援軍が朝鮮の人民軍を助けアメリカ軍と戦っているという話しをした。朝鮮半島の38度線はちょうど佐渡島を通っており、佐渡が分割されたらどうするかなどとても身近なことに感じた。高校に進むと新聞部に入ったが、社会的な関心が強かったのだと思う。父はその高校の書道の先生であり、選択科目は音痴なので音楽を避け、父の書道は嫌なので絵画を選択した。高校の3年間でデッサンから油絵までを勉強した。中学時代の社会科と高校時代の絵画の時間がいまの自分に大きく影響を与えている気がする。その後N先生は県教組の幹部になり、一時期、新潟学校生協の常勤役員をつとめたが、その時「教え子が生協の全国連合会にいた」と喜んでくれた。

高校3年生の時たまたま「文藝春秋」の講演会が佐渡で開催され丹羽文雄と吉田健一の話聞いたが、お寺育ちの丹羽の僧侶にならずに小説家になった話は進路に悩んでいた私を励ますものだった。我が家では長男、次男が大学に進学しており、父からは「仏教大学なら檀家が金を出す、我が家には余裕はないよ」といわれていた。しかし、「働

いて夜学にでも行くよ」と上京した。

上京—町工場で働いて

1955年、長男は既に大学を出て公務員として東大駒場の教務科に勤めており、その中野の下宿に転がり込んだ。最初の大学受験に失敗し、親戚の縁故で予定していた森永乳業の入社試験も、たまたま起きた森永ヒ素中毒事件のためにご破算になった。そのため大井町の町工場でアルバイトをすることになった。

中野の下宿は当時、中野組合病院と言っていた東京医療生協の中野総合病院のすぐ近くにあり、私ははじめて賀川豊彦の名前と「生活協同組合」なるものに接することになった。森永ヒ素事件は1970年代に被害者と森永との間で和解を見ることになり、被害者の救済事業を担う組織として「ひかり協会」が設立され、日本生協連は被害者・消費者の立場から協会の理事を引き受けることになった。もちろん、私は30余年後にその協会の理事になるとは想定もしていなかった。アルバイトさきの工場主は、高校生の夜間生は認めるが大学生の夜間生は認めてくれなかった。大学生は生意気だし、零細企業にそんな余裕もないと冷たかった。これが資本主義とい

生まれは新潟の佐渡島で1936年、2・26事件があつた昭和11年生まれで、男6人と末に妹1人の7人兄弟の3男だった。翌年、日中戦争がはじまり、終戦のときは国民学校3年生で、日の丸の旗を振って出征軍人を送り、天皇陛下万歳を叫ぶなど軍事下に幼年期を過ごした。空襲などの経験はないが、新潟など本土を爆撃した米軍機が佐渡上空を通り過ぎる際に爆弾を落とすからと警報が鳴ると防空壕にはいる訓練はさせられた。中学生だった長兄は近くに急造された滑空訓練場でグライダーの訓練をしており、小学生はあこがれを持って見学して

うものかと教えられた。そこで大学は夜間部も合格したが、やはり昼がいいと早稲田の第一文学部に進学することにした。

56年4月に入学し社会学を専攻した。実証的な社会学をやりたいと考え農村問題研究会に入り農村の実態調査などに毎年取り組んだ。マルクス経済学の手法を使って社会的階層分析などをしたので、東大の大内力先生（農業経済）や福武直先生（農村社会）の本の方が大変参考になった。お二人の先生には20年後に大学生協連や研究所のことで大変親しくご指導いただくことになるが、もちろん当時はそのようなことは想像もしなかった。早大の恩師の武田良三先生には「君の卒論は社会学でなく経済学だ」と迷惑をかけたが、10年後に母校に戻り生協の専務になった時には日本生協連のコープテレビの開発委員会に名を連ねるなど、生協に協力いただいた。これも想定外だった。先生は電気製品には全くの素人だったが、生協と不当に高いカラーテレビの値下げ要求運動への理解者だった。

早大入学―寮生活と勤評、警職法闘争

大学に入学しての最大の問題は経済―金がないことだった。

幸い入学式のあとすぐに手続きをして東伏見の学生寮に入ることができた。東伏見寮は戦闘機を造っていた「中島飛行機」の元社員寮をそのまま学寮にしたもので、近くのラグビー部などのグラウンドなども中島飛行機の工場や飛行場跡だった。東伏見から西北の立川方面は軍需工場が集まっていた地域で米軍の立川飛行場につながっていた。寮は4棟、二階建てで300名程いたと思う。寮費は月500円。入寮と同時に寮長にさせられ学生課との交渉係となったが、先輩は寮費は払うなと言う。学生課は「月500円は電気代にもならない」と言うがみんな払おうとしなかった。おんぼろの畳部屋だったが、電気コンロで炊事もできて家賃はただ？なので、なかには大学でなく会社に通っていると言われる先輩もいたのに驚いた。

この寮で驚かされた2番目は砂川闘争のことである。新入生を集め先輩は「東伏見駅や寮の周辺で警察から何か聴かれることがあると思うが何も答えるな」という。当時、米軍立川基地拡張に反対する砂川闘争がはじまり、寮には他大学の学生をふくめいろいろな人が出入りしており警察の監視下にあったらしいが、新入生はよく知らなかった。知らないことは喋れないと言うと「知っているか

どうかでなく答えることが問題なのだ。黙秘だ」と言う。その先輩の「黙秘だ」という言葉に緊張した。

これを契機に砂川闘争に関心を持ったが、畑に座り込んだ農民や学生が警官隊にごぼう抜きにされる姿などはテレビで見ただけで、その運動に参加することはなかった。しかし、その闘争の勝利は勤務評定反対闘争や警職法反対闘争などに継続され、1年生の後半からその集会やデモに参加することになった。農研やクラスの仲間と日比谷や清水谷公園での集会やデモに早稲田から都電で駆け付けた。

寮委員会は、寮費を払わないだけでなく寮に食堂をつくれと大学に要求することになった。学生課は「300名そこそこで寮食堂などはつくれない」と拒否。全寮連などの活動が活発な時期であり、もともと大学も中島飛行機の社員寮をそのまま使っていたこともあり、寮費不払いにも強硬な態度はとらなかったが、食堂は拒否した。そこで、私は数人の寮生と生協本部に食堂をつくってくれないかとお願いにいった。が、大学と同じ答えて寮食堂は無理だとにもなく断られ、寮生たちは「生協は学生の生活の苦しさは分かっている。生協は民主化すべきだ」と息巻いた。

早大生協の組織部へ―すぐ大学生協連とも関わる

2年生の終わりの58年2月にその生協が「機関紙担当組織部員、手当3000円」で募集していることを知り応募し、採用された。生協の食堂以外の購買・書籍・食品・サービスの各部署は文学部の地下にあり、毎日のようにコッペパンと10円牛乳の世話になっていたのと新聞づくりは高校時代から好きだったので「生協は民主化すべきだ」と言ったことなど忘れた顔で応募した。

当時の労働者の最賃要求が月給6000円だったので、3000円は悪くない手当であり、育英資金もあり他にちよつとバイトすればなんとかできる収入であった。当時の生協は「協組」と呼ばれており、専務理事も常務理事も学生で、専従者では生協創立のころからのメンバーの森定進さんが総務担当理事で入っていただけだった。組織部に入ると機関紙の編集だけでなく、当時「全協」と呼ばれていた大学生協連の機関紙「学協運動」の編集も手伝うため都電で代官町の全協にも通った。全協は現在の北の丸公園にあった元近衛師団の兵舎に在った学徒援護会の隣室を借りており、東京学生会館の寮棟ともつな

がつていた。6月早大生協の常任理事になり、全協Ⅱ大学生協連担当となった。この年の3月、全協は法人化を決議、現在の大学生協連となったが、それを進めたのは法人格を取得していた東大生協など7単協で、まだ法人格を取得していない早大生協には資格がなかった。3月に千葉・勝山で開かれた全国理事会の場で法人としての設立総会が持たれ、早大の専務だった町田哲夫君も理事として参加していたが、正式メンバーではなかった。私はその年の8月に東大で開催された第1回通常総会で理事に選出され、全国常任理事・東京地連担当となった

そのころの大学生協連は専務理事の杉本時哉さんと事務局員の清水美知子さんの二人が常勤者で、前年に発足したばかりの全国事業委員会事務局の高木敬一さんと学生の東大駒場生協選出常任理事・機関誌担当の山田誠君と東京地連担当常任理事の私が半常勤として勤務していた。理事会は会長・島田啓一郎（同志社大）、副会長・平田富太郎（早大）、近藤英男（東学館）、専務理事・杉本と全国事業委員会委員長の島根善太郎さん（東大駒場）以外は全員が学生だった。多くの単協で専務、常務は学生だったため、専従専務が全国理事に加わるのは翌

59年東大・塚崎宏、60年早大・森定進、61年北大・野崎弘明、同大・横關武と徐々にであった。

大学生協連が法人格を取得したのは57年9月の比叡山大会の決定によるものであったが、比叡山大会は法人化方針と合わせ大学生協の「運動課題3つの柱」を決めたことで画期的だった。それは早大生協にも大きな影響を与えた。大学生協連の常任理事としての私の大きな課題の一つが早大生協の法人化問題であった。当時、大学側が大学という学校法人のなかに別法人が生まれることを歓迎しなかったこと、特に早稲田では教職員生協というもう一つの生協があったこと、学生の気分としては、「国の認可」を受けてとやかく干渉されることへの警戒感もあった。分かり易くいえば、例えば大学生協連は法人化したら「総会」が定款上の規定だが、全学連のように従来通り「全国大会」の方がいいと法人化後も会場の看板は変えなかった。早大でも「総会」のイメージは「総会屋」が話題になっていたりこともあり、大株主が集まって談合する会合のようだと学生は嫌った。

協組から生協へ——法人化と専従専務制

58年度、早大生協の事業規模が1億円を超えたこともあり、専従専務制への移行を念頭に置きながら、法人化について大学との協議をすすめることとなった。東京都は職域生協は職域に一つが原則だという見解なので、教職員生協との合併が必要であり、生協は大浜総長に生協の法人化への理解と教職員生協との合併についての調整を要請した。大

慣例になっていた。この総代会での理事選挙で幸いトップ当選した私は、森定さんを専務に推薦して、はじめての専従専務理事に就任していただきたいき、自分は常務理事で留任した。これまでの「協組」は生活協同組合Ⅱ生協になり、「学生生協」から教職員を含む全学組織として生まれ変わることとなった。

一定に設けた理事会をつくり「学生生協」から脱し、事業安定化を図ってほしい、そのためには専務理事は学生や教職員でない専従者が望ましいと見解をしめしたうえ、協力を約してくれた。教職員組合にも理解、協力を得て、教職員生協との合併話を進めたが、教職員生協が事業的にも行き詰っていたこともあり、合併への合意を得ることができた。そして59年6月総代会で法人化を決定した。第1回理事会で森定進さんが初代の専従専務理事に選任された。当時の早大生協では各学部から選出される総代と理事立候補者はお互いに知らない関係なので、理事選挙でトップ当選者が専務理事、2位が総務担当常務理事、3位が組織担当常務理事になるという

57年比叡山大会は、大学生協の運動課題として3つの柱（教育環境整備、消費者運動、平和と民主主義）を決定したが、「教育環境整備」運動は学生組合員に説明しづらいテーマだった。早大でいえば、3号館地下（15坪）の立ち退きをうけて、施設獲得運動をすすめていた頃であり、あまり「教環」運動という言葉に馴染めず、食堂獲得運動と言った。その時、食堂主任だったのが稲川和夫さん（のち奈良コープ理事長）で、彼の指導もあり狭い地下食堂が地上の独立家屋に移転できた。消費者運動の一つは10円牛乳を守る運動だった。食品部でアルバイトをしながらお笑い芸人を目指していた伊東四郎は、57年頃「早大生協では10円牛乳を9円で売って人気があった」と話していたが、59年にはすでに牛乳メーカーから10円で売るなどという圧力もあり、値上げをせずに10円という価

格をいかに守るかという局面になつており、八千代牛乳など各地の酪農組合との連携で10円牛乳を守る取り組みを行っていた。また、59年4月、大手新聞社の談合(独禁法違反)に対する新聞代値上げ反対に取り組んだが、学生はあまり新聞を自分で買っていなかったが、学生理事の安藤政武君(後の生活問題研究所主任)が中心となつて戸山ハイツ生協と提携して、地域の物価値上げ反対等の共闘組織づくりをすすめて、値上げ分を不払し供託するという反対運動をすすめていた。

安保闘争―東京地連としての取り組み

平和と民主主義を守る課題でいえば、早大生協は大学生協連東京地連の主力として、勤評・警職法反対闘争に取り組み、58年10月に発足した警職法改悪反対国民会議に参加していたが、それを母体に59年3月に安保改定阻止国民会議が発足すると大学生協連とともにこの国民会議に参加した。

安保闘争では59年当時の私は東京地連のデモ責任者として数次にわたる統一行動に参加していた。60年の春、日本生協連に就職の予定をもらっていたが、貧乏団体の日本生協連は6月の総会で予算が確定

したら正式採用するから待機してほしいと言われ、急遽卒論を出すのをやめて、1年留年することにした。安保闘争は、岸首相の民意無視の横暴なやり方に反発し、4月15日の国民会議第15次統一行動頃から大きく高揚し、5月19日衆院安保特別委員会で国会議長が警官500人の出動を命じ、野党議員を排除し、5月20日未明改定案を強行採決したことを契機に、文化人をはじめとする数十万人が国会前で抗議活動を行う大運動となった。とりわけ6月15日に全学連が国会突入した際に東大生樺美智子さんが亡くなったことも国民の大きな憤激をかった。この日、すでに国民会議とは訣別していた全学連は、国民会議の請願デモの先頭隊列に現れて、国会突入を図っていた。

大学生協連は、彼らとの一線を画すために全学連の隊列には加わらず、最後尾の文化人の隊列で行進していた。その時にその隊列にトラックに乗り込んだ右翼が日本刀を振りかざして、殴り込みをかけ、67名のけが人が出た。文化人隊列は、殴り込みでちりちりとなり、転んで怪我をした人を含めて、参議院議員会館にある診療所に運びこまれた。デモ責任者の私は診療所のけが人を探し、そのなかに労組として参加した早大生協

職員を見つけたが、東大生協の職員は顔が腫れ上がり人相も良くわからない程になつていた。彼は、服装が黒づくめだったこともあり、混乱のなかで右翼と誤認されたりしかつた。当時デモ隊側は安保反対と書いたベニア板を棍棒に貼り付けたプラカードを携帯し、右翼や警官の暴力を防衛していたが、その棍棒で殴られたのではないかという。その後、多数負傷者を出した文化座など新劇関係者が中心に右翼団体を刑事告発したが、右翼団体は実は警察に依頼されてやったと供述し、一方警察は、警備を頼んだだけだと言いつつ逃げた。私は早大生協職員に刑事告発の原告になることを勧めたが「親元に知られ心配させたくない」と原告になるのを辞退した。

樺美智子の死について共産党は彼女がブンドだと国民葬などに反対したと後で聞いたが、当時の私は国民会議の統一行動に反する過激な行動をとる全学連に批判的であったが、生協の学生理事には「生協は哀悼と抗議の半日休業をしろ」という意見が多く、私も同調していた。森定さんに「生協はこれまでも安保強採決に抗議する半日ストなどやったから今回も」と話したが、断られた。私は彼について何も知らなかったが、父の社会学者の樺教授に親

近感をもっており、過激派とはいえない官憲の犠牲になつた樺さんに対する学生たちと気持ちは同じだった。その6・15行動のまえの6・4ゼネストでは、早大生協は学生と生協労組員400名が国労のストを支援するということで新宿駅に泊まり込み、私も早朝ストの集まりで激励演説をした。そのような演説などが苦手で自治会活動Ⅱ学生運動には深入りせずいたのだが、それも留年したための経験だった。

日本生協連は6・4ゼネストの前日、6月3日に市ヶ谷で全国総会を開き、総会で出された大学生協連代議員からの動議を採択し、安保改定阻止のために国会への陳情行動を行うこととなり、総会参加者のほとんどが市ヶ谷から国会にむけてのデモ行進に参加した。年度予算も提案通り決定され、私は無事に職員として採用されることとなった。8月には大学生協連の総会(全国大会)が早大の小野講堂で開催され、開催校の役員ということもあり、日本生協連から休暇をもらつて総会に参加、議長を務めた。当時の恒例で総会は3泊4日の長丁場で、安保闘争の総括などをめぐり大演説が続いた。

【この続きは次号掲載予定です】

大学生協存続と応援のためのご寄付のお礼と継続した応援のお願い

2021年6月1日

大学生協友の会幹事長 伊野瀬十三

4月中旬、友の会幹事会より「東京ブロックへの応援募金」を呼びかけましたところ、5月中旬で早々と目標額に到達しました。ご協力に心から感謝いたします。(目標は7月の友の会総会までに100万円の募金)以下の皆様から多大な賛助をいただきました。

【ご報告】

募金協力人数 62名 合計額 101万円 (2021年5月14日現在)

お名前(敬称略、振込日付順)

倉橋潤、馬場瑛、大久保厚・詠子、帆刈静枝、藤岡武義、齋藤嘉璋、永瀬亘良、大友廣子(弘巳)、川上邦博、木下先子、大野清貴、星野正思、石井愛、名和三次保・敬子、尾添仁、小見弘、永山貢一、和知晴男、佐藤哲雄、塩谷晃、植草修、岡本好廣、栗原義行、島田満、川村誠一、伊東啓子、木原勇司、原田敏朗、山岸健次、青木宏達、平田真弓、石川誠一、小林梅治、古畑志津子、薄葉康男、高橋平明、山崎昭太郎、西村一郎、説田信義、安藤次子、山寄敏夫、伊野瀬十三、阿部憲、滝澤マツ子、矢野都紀子(充)、小林剛、岩井稔、大内孝夫、釜田春美、松浦亨、矢野香栄・今日子、佐伯享児、田中義信、三浦公雄、和知稔、平健三、石田千加子、菅野清、遠山孝治

当初の目標は達成したものの、都市圏の大学生協を巡る困難は、三度目の非常事態宣言の発令もあり、大学のオンライン授業が継続しキャンパスへの登校率が回復せず、事業環境の厳しさは政府の給付金支援策も途絶えた中で、なお危機的な現況に変わりはありません。

幹事会は、友の会会員への「大学生協の存続と応援のためのご寄付の活動」を継続します。

尚、会員生協並びに関西ブロック(旧関西地連)など東京ブロック以外への募金については、振込用紙の通信欄にその旨、ご記入頂きたくお願い致します。

引き続き、皆様のご協力をお願いする次第です。

2021年度第2回幹事会報告

開催日時: 2021年4月10日(土) 14:00~

場所: 大学生協杉並会館会議室

B103・106

以下、一部はオンラインによる出席

出席: 伊野瀬、馬場、中村、説田、倉橋、

大久保、川上、岡安、山崎、釜田、柳

ヶ瀬、宮寺、薄葉、塩谷、平田、藤村、

柴田(会計監査) 和知

欠席: 古畑、有田、隈部(会計監査) 古腰

(敬称略)

報告事項

1) 幹事近況報告

2) 会員及び他大学生協OB会の動き

3) 事務局活動(全てオンラインによる)

1/16・17・20・26・2/13・

27事務局会議

1/25 中森専務インタビュー

2/08 大築事務局長インタビュー

3/06 ZOOM模擬幹事会

4) 会員情報

現在の会員数: 271名

新規加入者: 齋藤淑人

5) その他

新規加入の齋藤淑人さんを事務局員に登録した。

協議事項

1) 大学生協応援の取り組みについて

2) 2021年友の会総会特別企画(案)

3) ZOOM有料会員取得とオンライン交流

会の運用

4) 2021年度第3回幹事会開催日時

7月3日土曜日11時ないし12時

(詳細は後日案内) 以上協議確認した